文部科学大臣賞

お茶わんいっぱいの幸せ

茨城県常陸太田市立峰山小学校五年
笠原　穂

「疎開って何？ひいおばあちゃん。」

曽祖母と一緒に戦争についての番組を観ていた時に、私と同じくらいの年齢のたくさんの子どもたちが、大きなリュックを背負って汽車に乗っている姿が映っていました。そして、ナレーションで、疎開という言葉が何度も出てきたので、私は曽祖母に、どういう意味なのかを聞きました。

「都会は空しゅうが激しかったんだ。だから都会の子どもたちが、田舎に来て泊まってたんだよな。それが疎開だ。ひいばあちゃんの家にも、東京からいっぱいの子どもたちが来てたんだ。今思うと、親元から離れて暮らすのは、さびしかったっぺな。東京から来た子どもたちは空腹で、こっちでご飯を食べた時は嬉しそうだったぞ。すごい勢いで、ご飯を食べていたんだから。」

と、疎開のことを話してくれました。

曽祖母は、昭和六年生まれで戦争を経験しており、実家が寺でしたので、疎開先として東京から来た子どもたちを受け入れていました。曽祖母の実家も、米を手に入れるのは大変なことでしたが、東京の子どもたちは本当に食べる物がなく、疎開後、しばらくの間は心も体も元気がなかったそうです。そんな子どもたちを見て、少しずつ元気づけようと、曽祖母たちは、さつまいも入りのご飯や小豆入りのご飯をごちそうしました。また、親元から離れて暮らすさびしさから、夜泣いてしまう子どももいましたが、食事の時には涙をふいて、嬉しそうにご飯を食べていた姿が印象に残っているそうです。

今は、学校の給食でも、ほかほかの温かいご飯が出てきます。スーパーやコンビニでもご飯がすぐに買えます。もちろん家でも、おいしいご飯が山盛り食べられます。当たり前のように食べているご飯ですが、曽祖母の話を聞き、十分に、ご飯が食べられなかった時代があったことにおどろきました。そして、私たちが好きな時に好きなだけ、ご飯が食べられることは、幸せだと思いました。以前はお茶わんに米粒が残っていても、

「まぁいいか。」

と、思っていましたが、今は一粒も残さずに食べています。

今年の夏、私に疎開のことや戦争中のご飯のことを教えてくれた曽祖母が亡くなりました。曽祖母の仏だんには、ご飯がお供えしてあります。仏飯と言って、朝一番にたきたてのご飯をお供えして、ご先祖様や仏様への感謝の気持ちを伝えるという意味があると母に教わりました。

「ひいおばあちゃん、天国へ行っても、おいしいご飯をいっぱい食べてね。」

と、仏だんに話しかけています。

私は、ご飯が大好きです。大好きなご飯が食べられることへの感謝の気持ちをこれからも忘れずに、今日もご飯をおかわりします。